

擬ディオニシオスのキリスト論

——「神人的な働き」 θεανδρική ἐνέργεια を巡って—— 袴田 渉  
神の光を見ることをめぐって

——グレゴリオス・パラマスの擬ディオニシオス理解——  
袴田 玲

|   |       |
|---|-------|
| キリスト教修道制の成立<br>——隠修制と共住制——  | 戸田 聡  |
| 修道制における隠修士の意義<br>——その東方的起源と西方的展開——  | 桑原 直己 |
| アウグスティヌスにおける「音楽」の概念<br>——「魂論」としての『音楽論』——  | 樋笠 勝士 |
| 鳴り響く永遠真理<br>——アウグスティヌスの数理思想の17世紀的展開——   | 名須川 学 |
| 身体を張る (extendere) アウグスティヌス<br>——『告白』における distendre, continere, extendere<br>をめぐって——                                 | 宮本 久雄 |
| <b>【加藤信朗著『アウグスティヌス・告白録講義』書評会記録(続)】</b><br>書評会における討論<br>アウグスティヌス文学のヘブライ的地平<br>——『告白録』第1～9巻における<br>「キアスムス(交差配列法)」構造—— | 宮本 久雄 |
| <b>第14号</b>   |       |
| 巻頭言   | 桑原 直己 |
| <b>【論文】</b>   |       |
| 神的エネルギーの経験と信<br>——ロゴス・キリストを信じるとは、いかなることか——  | 谷 隆一郎 |
| 390年代におけるアウグスティヌスにとってのパウロ<br>——『告白録』の骨格形成に寄せて——   | 出村 和彦 |
| 救済された理性<br>——サン・ヴィクトール学派の聖書神学と観想論——   | 中村 秀樹 |
| アウグスティヌス『三位一体論』における実体の相互内在の問題<br>——中世哲学の視点から——  | 横田 蔵人 |
| <b>【研究ノート】</b>  |       |
| アウグスティヌス『音楽論』第6巻における魂の鍛錬  | 北川 恵  |

## 第 11 号

巻頭言

野町 啓

暗い絵の構図

——アウグスティヌス『神の国』22, 22-24 における悪の問題——

荒井 洋一

アシキアクトムでの自由学芸

——初期アウグスティヌスと自由学芸——

水落 健治

イアンプリコス以前以後

堀江 聡

【会設立 30 周年記念特別講義】

旧約注解者ヨアンネス・クリュストモス

ロバート・C・ヒル (武藤慎一訳)

## 第 12 号

巻頭言

塩谷 惇子

視覚的言語のあなたへ

——『告白』第 7 巻第 10 章第 16 節・『詩篇講解』第 41 篇——

加藤 武

アウグスティヌスの『創世記』解釈と詩編の引用

——『告白』第 12 巻に即して——

田内 千里

ニュッサのグレゴリオスにおける救貧と否定神学

——名辞の神学への一試論——

土井 健司

アンティオキオア釈義学派におけるエウドキア

武藤 慎一

【ポーリーン・アレン教授講演】

21 世紀の視点から教父の社会倫理的テキストを読む際の課題

ポーリーン・アレン (土橋恵子訳)

【加藤信朗著『アウグスティヌス〈告白録〉講義』書評会記録】

加藤武 (司会)、水落健治・荒井洋一・久米博 (特定質問)、加藤信朗 (著者コメント)

## 第 13 号

巻頭言

水落 健治

ニュッサのグレゴリオスの情念論

——『魂と復活について』を中心に——

柳澤 田実

## 第9号

巻頭言

谷 隆一郎

異端者の生涯と思想

ポーリーン・アレン

——アンティオケイアのセウエロスの場合——

(中西恭子訳)

自然・本性(ピュシス)の開花への道

——証聖者マクシモスにおける神化(テオーシス)の  
文脈をめぐって——

谷 隆一郎

魂の階梯論における聖書解釈

——アウグスティヌス『マニ教徒に対する創世記注解』  
研究叙論——

上村 直樹

エリウゲナにおける動と静

今 義博

アレクサンドリアのクレメンスにおける「訓導者」

(paidagogos)の意義

秋山 学

アウグスティヌスにおける確実性の概念

——『告白』第7巻から——

中川 純男

## 第10号

巻頭言 忘れ去られているものの記憶

加藤 信朗

アウグスティヌス『告白』第8巻における回心譚の効用について

——「おこない」の意味——

松崎 一平

〈コスモス・ノエートス〉をめぐって

——アレクサンドリアのフィロンの場合——

田子多津子

静寂主義者グレゴリオス・シナイテスにおける祈りの随伴現象

——視覚体験、カルディア(心臓)の熱、喜悦——

久松 英二

“beata uita”概念と倫理的思考の基盤

——『告白』第10巻——

岡部由起子

「造られたものを通して」知るとはいかなることか

——アウグスティヌス『告白』第10巻6章——

佐藤真基子

エイレナイオスの聖霊論

塩谷 惇子

エペクタシスの道行き

宮本 久雄

Augustine the Bishop in the Light  
of New Documents

Peter BROWN

## 第7号

巻頭言

宮本 久雄

アウグスティヌスの聖書解釈をめぐって

——『神の国』からの視点——

加藤 信朗

淵が淵を呼ぶ

——『告白』13, 13, 14 ——

荒井 洋一

真理論の転回

——アウグスティヌス懐疑論批判の射程——

岡部由起子

存在の現成のダイナミズム

——受肉・神人性の教理と愛智との関わり——

谷 隆一郎

The Neoplatonic Theme of Return in Eriugena

Édouard JEAUNEAU

## 第8号

巻頭言 小さな神

熊田洋一郎

アウグスティヌス『創世記逐語注解』における

霊的被造物の向き直りについて

——アウグスティヌスの「コンウエルシオ」と

プロティノスの「エピストロペー」の比較研究のために——

森 泰男

アウグスティヌスの記号論

樋笠 勝士

青銅の蛇の物語

——予型論の意義をめぐって——

柴田 有

アウグスティヌスとストア哲学

——『問答法について』第6章〈言語起源論〉を中心に——

水落 健治

アレイオスとアレイオス主義再考 泉 治典  
 ニケアとの出会い  
 ——ヒラリウス『三位一体論』と信仰—— 出村 和彦  
 My Life-long Adventure with Saint Athanasius

Charles KANNENGIESSER

#### 第4号

巻頭言 破黙への教父哲学 今道 友信  
 「語りえぬ者」について  
 ——フィロンとユスティノス—— 柴田 有  
 オリゲネスのヨハネ福音書序文（ロゴス賛歌）の解釈  
 ——他のギリシア教父の解釈と比較しつつ—— 小高 毅  
 オリゲネスにおける解釈学的原理  
 ——『原理論』と『ヨハネ福音書注解』から—— 久山 道彦  
 「ギリシア人の剽窃」に関する  
 アレクサンドリアのクレメンスの見解 久山 宗彦

#### 第5号

巻頭言 加藤 武  
 διαλεκτικήとλογική  
 —— Ammonios Hermeiou, *In De Interpretatione*,  
 Prolegomena —— 水落 健治  
 テルトウリアヌスの結婚観 木寺 廉太  
 悪を選択する自由 岡野 昌雄  
 Augustine's Roman Empire:  
 Reaching out from Hippo Regius Neil B. McLYNN

#### 第6号

巻頭言 受容としての教父研究 柴田 有  
 古代の二人の歴史記述家：ヨセフスとエウセビオス  
 ——古さをめぐる歴史記述について—— 秦 剛平

## パトリステイカ既刊号目次

### 創刊号

- 巻頭言 加藤 信朗  
隠喩の生成  
——Ambrosius, *Hymnus I* から  
Prudentius, *Liber Cathemerinon I* へ—— 加藤 武  
トマス・アクィナスにおける摂理と人間の自由  
——『真理論』第2問第12項—— 渡部 菊郎  
フィロンの聖書解釈の一側面 野町 啓  
アレクサンドリアのクレメンスにおける古典学の変容  
——『オデュッセイア』の解釈に向けて—— 秋山 学

### 第2号

- 巻頭言 泉 治典  
アルクイヌスとフレデギスス  
——文法学・論理学・神学をめぐって—— 清水 哲郎  
ディオニシオス・アレオパギテース『神名論』における  
新プラトン派的言語とキリスト教的言語  
——『神名論』第2章を中心に—— 熊田陽一郎  
教父研究の現在 今道 友信  
(始まり)の問いとその行方  
——「ヘクサヘメロン」の西と東—— 萩野 弘之

### 第3号

- 巻頭言 K・リーゼンフーバー  
言葉と真理  
——アウグスティヌス『教師論』における問題の所在—— 中川 純男